

初期必殺シリーズ論

小野ユージン

必殺シリーズの時代区分

必殺シリーズの時代区分

○初期・中期・後期の区分

必殺シリーズをどのように時代区分するかは、何を基準にするかによっていくつかのタイプに分けられる。ここで提示するのは筆者の個人的な価値観に基づくものにすぎず、すべてのファンにここでの時代区分案を強要するつもりはないことをあらかじめお断りしておく。

○初期シリーズ 1作目・必殺仕掛人から10作目・新必殺仕置人まで

<ピカレスクロマン>(お金を貰って人様のお命を頂戴する裏稼業の人間たちの姿を描くというテーマ)として作品が制作されていた時期を初期とする。

初期シリーズは第1期と第2期に分けられるが、5作目の「必殺必中仕事屋稼業」をどう位置付けるかで3つのパターンが考えられる。

ーパターンa

第1期 1作目・必殺仕掛人から5作目・必殺必中仕事屋稼業まで

第2期 6作目・必殺仕置屋稼業から10作目・新必殺仕置人まで

ーパターンb

第1期 1作目・必殺仕掛人から4作目・暗闇仕留人まで

第2期 5作目・必殺必中仕事屋稼業から10作目・新必殺仕置人まで

ーパターンc

第1期 1作目・必殺仕掛人からまで4作目・暗闇仕留人まで

移行期 5作目・必殺必中仕事屋稼業は過渡期または移行期の作品とみなす

第2期 6作目・必殺仕置屋稼業から10作目・新必殺仕置人まで

*第1期の特徴

・必殺シリーズの土台（基本フォーマット）が形成された。

「必殺仕掛人」と2作目「必殺仕置人」の2作品によって、その後のシリーズの土台、基礎となるフォーマットが形成される。3作目「助け人走る」は「必殺仕掛人」の延長線上で、「暗闇仕留人」は「必殺仕置人」の延長線上で、それぞれ続編的な作品が制作された。

・<ピカレスクロマン>、<カタルシスドラマ・懲悪ドラマ>（主人公たちが、頼み人の晴らせぬ恨みを晴らし、許せぬ悪人たちを制裁することによって視聴者にカタルシス感をもたらそうとするテーマ）という2つのテーマに基づいて作品が制作された。

・キーパーソンー山村総、津坂匡章（秋野太作）、野川由美子

*第2期の特徴

・第1期で形成された基本フォーマットを踏襲しながらも、シリーズごとに様々な創意工夫を凝らした応用発展期。新しいフォーマットを形成したわけではないので、形式化、様式化はみられるが、個々の作品は完成度の高いものが多い。特にスタッフたちが「必殺」の魅力、特徴を十分に把握するようになったので、脚本も演出もマニアックなファン心理をくすぐるものが多い。（この時期の形式化、様式化をワンパターン化の予兆とみるか、様式美の完成とみるかは人によって意見がことなるだろう。筆者からみれば、必殺のマンネリ化の予兆は、原作なしのオリジナル作品としては1作目にあたる「必殺仕置人」の時に既にみられる。元々マンネリ化、ワンパターン化しやすい題材を扱いながら、創造力の高さによって水準以上の作品を5年間10作近くも創り続けたことが凄いことなのである。シリーズが長期化すればマンネリ化や質の低下に直面するのは当たり前のことであって、後期シリーズのマンネリ化や質の低下の原因を1975年に製作された「必殺仕置屋稼業」にもとめるといえるのは、的外れで底の浅い意見にすぎない。（注：80年代、90年代にはレベルの低い「仕置屋」批判、「仕置屋」バッシングが一部のファンによって繰り返されていた。）

・＜ピカレスクロマン＞重視の制作姿勢。

「必殺仕置屋稼業」、7作目「必殺仕業人」、「新必殺仕置人」の3作品は、＜ピカレスクロマン＞というテーマのもつ魅力や背徳性を全面的に追及した「ピカレスクロマン3部作」ともいえるべき作品である。この間に＜ピカレスクロマン＞度の弱い2作品、8作目「必殺からくり人」、9作目「必殺からくり人・血風編」が制作される（ただし「必殺からくり人」は、ピカレスクロマン度は薄いが高作品の完成度は高い）。

・中村主水が必殺のメインキャラクターとなる

・キーパーソンー中尾ミエ、渡辺篤史

緒方拳、山崎努、沖雅也は初期シリーズ全体のキーパーソン。

草笛光子や山田五十鈴は初期から中期（以後）にかけてのキーパーソン。

「必殺必中仕事屋稼業」は、テーマを重視すれば第1期に、基本フォーマットやキーパーソンを重視すれば第2期に分類できる。

第1期、第2期どちらの要素も備えていて、中村主水が必殺シリーズにおけるサブ的ポジションからメインポジションに移行する狭間にあるから、移行期、過渡期に位置させることもできる。私自身は、テーマ（ピカレスクロマンというテーマ）を重視しているので、第1期最後の作品に分類している。

○中期シリーズ 11作目・新必殺からくり人から14作目・翔べ!!必殺うらごろしまで

*中期シリーズ＝第3期の特徴

・転換期、試行錯誤期

第1期の基本フォーマットを踏襲して出来ることはほぼやりつくしてしまったので、あらた

なフォーマットを模索したり、確立したフォーマットを壊したりすることによってマンネリ化を防ごうとした時代。

市井で暮らしている一見普通の人が裏稼業を営んでいるという、従来の「江戸定着もの」にかわり「殺し旅」というあらたな設定が考案される。

「江戸定着もの」を踏襲した12作目「必殺商売人」では、主水の「種なしかぼちゃ」という設定が壊される。

「翔べ!!必殺うらごろし」はそれまでの様々な設定に変更が加えられる。

マンネリ化を防止するために様々なアイデアがだされる。

「錦絵を炙ると殺す標的が浮かび上がる」という設定。

「翔べ!!必殺うらごろし」でのオカルト色の導入等。

・＜ピカレスクロマン＞というテーマの放棄、＜カタルシスドラマ・懲悪ドラマ＞というテーマに基づいた作品制作。

頼み人の晴らせぬ恨みを晴らす、悪人たちを制裁するというテーマが強調され、初期のシリーズにあった背徳感がなくなる。主人公たちも、義賊、人助的な意識で仕事を行うキャラクターが大部分となり、稼業（ビジネス）として冷徹に裏の仕事を行うというプロフェッショナル（プロの殺し屋）がいなくなる。

スタッフがなぜ＜ピカレスクロマン＞というテーマを放棄したのかはわからない。ピカレスクロマンとして描きたかったことは、「新必殺仕置人」までですべて描きつくしたのかもしれない。あるいはピカレスクロマンに重きをおいた作品では視聴率がとれないと判断したのかもしれない（関東に限れば「必殺仕置屋稼業」「必殺仕業人」「新必殺仕置人」の平均視聴率は、第3期のものよりも低い。ただし「翔べ!!必殺うらごろし」を除いて）。

	関東平均視聴率	関西平均視聴率
1・仕掛人	16.6%	22.1%
2・仕置人	22.8%	26.1%
3・助け人	18.6%	22.8%
4・仕留人	19.8%	24.9%
5・仕事屋	16.4%	22.4%
6・仕置屋	13.4%	20.4%
7・仕業人	11.6%	18.3%
8・からくり人	11.2%	16.7%
9・血風編	9.0%	14.5%
10・新仕置人	10.9%	17.1%
11・新からくり人	14.8%	20.0%
12・商売人	14.6%	17.2%

13・富嶽百景	13.3%	14.1%
14・うらごろし	11.5%	12.2%
15・仕事人	15.2%	17.8%

ビデオリサーチ（「週刊テレビ番組」第14巻第34号 昭和62年8月28日号 東京ポスト発行より）

個人的な感想を言えば、＜ピカレスクロマン＞の放棄がもたらしたシリーズの質的变化はかなり大きい。初期のシリーズは矛盾する2つのテーマを抱えていたことが、作品にダイナミズムをもたらし、また作品世界に奥行きをもたらしていた。テーマが＜カタルシスドラマ・懲悪ドラマ＞1つになってしまったことにより、作品（世界）が「勸善懲悪時代劇」に近い平板なものになってしまった。ストーリーの面からみても、初期は「ピカレスクロマンに重きをおいたもの」「カタルシスドラマ・懲悪ドラマに重きをおいたもの」「2つのテーマの矛盾や葛藤を活かしたもの」「2つのテーマに関係なくつくられたもの」とバラエティに富んだ作品が製作されていた。しかし中期以降は、悪役の悪事や被害者・頼み人たちの悲しみの姿を描いた作品が大半となり、単調な作品が増えた。（一部のファンは、マンネリ・ワンパターン化した後期の作品をバラエティ路線などと言って非難していたのだから面白いものである。バラエティ番組を舐めているとしかいいようがない。）

- ・ 殺し旅の設定、山田五十鈴（からくり人）が主水シリーズよりもメインとなる。
- ・ 主水シリーズと非主水シリーズのキーパーソンの共演がみられる。
「必殺商売人」の藤田まことと草笛光子
13作目「必殺からくり人・富嶽百景殺し旅」の山田五十鈴と沖雅也
- ・ キーパーソンー火野正平、鮎川いずみ

○後期シリーズ 15作目・必殺仕事人以降

「必殺仕事人」に対しては、雑誌などでよく原点回帰した作品と語られている。筆者自身は必殺の原点は＜ピカレスクロマン＞というテーマにあると考えているので、「必殺仕事人」が原点回帰した作品であるとは思っていない。（必殺の原点について筆者と異なる考えをもつ人が原点回帰を唱えるのは、その人の自由であるので否定はしない。）

まあ原点回帰のことは別にして、「必殺仕事人」はシンプルになった作品であるとはいえる。マンネリ化を防ぐための試行錯誤は影を潜め、初期の基本フォーマットを踏襲したオーソドックスな作品作りがなされた。考えられるアイデアはすべて出し尽くしたし、基本フォーマットを無視した「翔べ!!必殺うらごろし」が視聴率的に惨敗したから、マンネリ化してもいいから、視聴者がイメージしているだろう「必殺らしい作品」を作ろうという、一種の開き直りを感じさせる作品である。

・後期シリーズのテーマに関しては、中期シリーズに対して述べたことがそのままあてはまる。ただ、「必殺仕事人」の途中で、ワンパターン化した作品を求める視聴者のためにワンパターン化した作品を制作するという、「必殺の水戸黄門化」ともいえる現象が生じた。

また、17作目の「新必殺仕事人」の途中からは「ダーティヒーローものからヒーローものへ」という根本的な変化が生じた。これによって必殺の主人公たちは、裏世界に生きるアウトローから庶民の味方・正義の味方へと変質した。このことは既に『必殺！裏稼業の凄い奴ら』（フットワーク出版社 1994年刊行）でも触れられている。

後期シリーズをさらに細分する場合、内容で区分するのならば「新必殺仕事人」の途中で本質的な変化が生じているが、それよりも出演者によって区分するのが無難であろう。

第4期 15作目・必殺仕事人から21作目・必殺仕事人4まで

移行期 22作目・必殺仕切人

第5期 23作目・必殺仕事人5から29作目・必殺剣劇人まで

「必殺仕事人・激突！」以降の作品は制作時期が離れているので例外とした。

・後期のキーパーソン 鮎川いずみ、西崎みどり、山田五十鈴、ひかる一平

第4期のキーパーソン 三田村邦彦、中条きよし、京マチ子、高橋悦史、本田博太郎

第5期のキーパーソン 村上弘明、京本政樹、かとうかずこ

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月24日公開したものを転載)

必殺シリーズの作品分類

必殺シリーズの作品分類

必殺シリーズは、一般的には主水シリーズと非主水シリーズとに分類されている。だが、この分類は内容における分類ではない。

必殺シリーズを内容によって分類すると、「必殺仕掛人」の系譜を継ぐ作品、「必殺仕置人」の系譜を継ぐ作品、どちらにもあてはまらない作品の3種類に分けられる。

○「必殺仕掛人」の系譜を継ぐシリーズ（「 」の中の数字はシリーズ数）

ー該当するシリーズ

「1・必殺仕掛人」「3・助け人走る」「5・必殺必中仕事屋稼業」「6・必殺仕置屋稼業」「10・新必殺仕置人」「15・必殺仕事人の初期」

ー設定の特徴

「仲買人仲介型」の設定＝頼み人から仕事の依頼を受け、殺し屋に仲介する仲買人が存在している。（池波正太郎の「仕掛人藤枝梅安」では蔓と表現されていた。）

仕掛人の元締・音羽屋半右衛門、助け人の元締・清兵衛、仕事屋の元締・おせい、仕置屋の仲立屋・おこう、新仕置人の元締・虎、仕事人の元締・鹿蔵。

ーストーリーの特徴

仕事の依頼を受けた後の、主人公たちの裏稼業を描いたプロットが中心のストーリー。フィクション・ハードボイルド色のつよいストーリーが多い。

○「必殺仕置人」の系譜を継ぐシリーズ

ー該当するシリーズ

「2・必殺仕置人」「4・暗闇仕留人」「7・必殺仕業人」「12・必殺商売人」「15・必殺仕事人の中期以降」

ー設定の特徴

「直接依頼型」の設定＝仲買人が存在せず、殺し屋・情報屋が直接頼み人から仕事の依頼を受ける設定。「必殺仕事人」は中期以降も形式的には仲買人（元締）が存在しているが、実質的にはいないに等しいのでこちらに分類してある。

ーストーリーの特徴

悪役の悪事、仕事の依頼の原因となる事件や出来事、頼み人や被害者の悲しみの姿を描いたプロットが中心のストーリー。シリアスな人間ドラマが多い。

○ジャンル分け出来ないシリーズ

ー該当するシリーズ

「8・必殺からくり人」「9・必殺からくり人血風編」「11・新必殺からくり人」「13・必殺からくり人富嶽百景殺し旅」「14・翔べ!!必殺うらごろし」

ー解説

「翔べ!!必殺うらごろし」を除いて皆からくり人シリーズだが、内容の共通点はない。中期3作品の設定が「殺し旅」であること位である。ストーリー的には、「必殺からくり人」は仕掛人型、仕置人型両方の特徴をもつが、残りのシリーズは仕置人型と共通点が多い。

○必殺仕舞人以降のシリーズについて

ーストーリーの特徴

設定とストーリーに連関性がないのが後期シリーズの特徴である。設定にかかわらずストーリーは皆仕置人型と共通、ただし初期に比べてより単純でワンパターン化している。

ー設定による分類

「殺し旅型」＝「16・必殺仕舞人」「18・新必殺仕舞人」

「仲買人仲介型」＝「25・必殺仕事人5 激闘編」「28・必殺仕事人5 風雲竜虎編」

その他のシリーズは「直接依頼型」だったはずだが、20年以上前にリアルタイムで1度みただけなので詳細を覚えていないものもかなりあります。間違っていたら後期ファンの人ごめんなさい。

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月25日公開したものを転載)

2つのテーマ・3つのストーリー要素

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷 序

○2つのテーマ・3つのストーリー要素

初期必殺シリーズは、2つのテーマ、3つのストーリー要素から成り立っている。

1つ目のテーマは<ピカレスクロマン>。これは「お金を貰って人様のお命を頂戴する裏稼業の人間たちの姿を描く」というテーマである。

2つ目のテーマは<カタルシス（懲悪）ドラマ>。こちらは「主人公たちが、頼み人の晴らせぬ恨みを晴らし、許せぬ悪人たちを制裁することによって、視聴者にカタルシス感をもたらす」というテーマである。

この2つのテーマは本質的に矛盾した関係にある。「頼み人の恨みを晴らす、悪人たちを裁く」というテーマを強調すると、<ピカレスクロマン>のもつ背徳性は薄れてしまうし、作品自体「勧善懲悪時代劇」の1バリエーションになる。

一方、<ピカレスクロマン>に重きをおいた場合、「懲悪ドラマ」において制裁される側の人間たちを主人公に描くことになるから、「勧善懲悪時代劇」とは対極にある作品となる。

2つのテーマは、具体的にはストーリー作りと、裏の仕事を遂行する際の主人公たちの意識に反映されている。<カタルシス（懲悪）ドラマ>に重きをおいたストーリーは、悪役の悪事や被害者の悲しみの姿を描いた「シリアスな人間ドラマ」となりやすい。それに対して<ピカレスクロマン>に重きをおいたストーリーは、仕事の依頼をうけた後の主人公たちの裏稼業を描いたフィクション・ハードボイルド性の高いストーリーになりやすい。

また、<カタルシス（懲悪）ドラマ>に重きをおいた作品では、主人公たちは頼み人に代わってその恨みを晴らす、悪人たちを制裁するという明確な意志をもって仕事を行う。一方、<ピカレスクロマン>に重きをおいた作品では、主人公たちは頼み人への同情や、殺す相手への怒りの感情などをもたずに冷徹に仕事を遂行する。

3つのストーリー要素とは、「フィクション」としての面白さ、「ハードボイルド」としての緊張感、「シリアスな人間ドラマ」のことである。

殺し屋たちの裏稼業を描くというストーリー自体が「フィクション」色の強いものであるし、その他にもミステリー仕立ての作品、コメディタッチの作品などが「フィクション」としての面白さを追求したストーリーといえる。

「ハードボイルド」色の強いストーリーは、主人公たちの裏稼業を殺る（やる）か殺られる（やられる）かといった緊張感をもって描いたもの、敵対する裏稼業の人間たちとの抗争を描いたもの、主人公たちを捕えようとする役人（奉行所・火盗改め等）との抗争を描いたもの、主人公たちが逆に命を狙われるものなどがある。

「シリアスな人間ドラマ」とは、文字通りレギュラー・ゲスト・被害者・頼み人・悪役たちの間で繰り広げられるシリアスな人間ドラマのことである。「シリアスな人間ドラマ」のうち、悪役の悪事、被害者・頼み人たちの悲しみの姿を描いたドラマを「カタルシスドラマ」と呼び、それ

以外のものを「(狭義の) シリアスドラマ」と呼ぶこととする。

「フィクション」「ハードボイルド」はストーリー展開(筋書き、プロット)の面白さを追求したものであり、「シリアスな人間ドラマ」と対極にあるといえる。

・ストーリー展開(筋書き)の面白さを追求したストーリー＝「フィクション」＋「ハードボイルド」

・「(広義の) シリアスな人間ドラマ」＝「カタルシスドラマ」＋「(狭義の) シリアスドラマ」

初期の必殺シリーズは、各シリーズ毎にテーマとストーリーの比重のおき方が異なっていた。それが各シリーズの個性や特徴になっていたといえる。

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月26日公開したものを転載)

必殺仕掛人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷 1

1 作目・必殺仕掛人

ー 両テーマ並立、フィクション・ハードボイルド重視のストーリー

○テーマの特徴

必殺シリーズの2つのテーマは、シリーズ1作目「必殺仕掛人」において明確に提示されていた。オープニングナレーション中の、「晴らせぬ恨みを晴らし、許せぬ人でなしを消す」というセリフが＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマを表現し、「人知れず仕掛けて仕損じなし」「ただしこの稼業江戸職業づくしにはのっていない」というセリフが＜ピカレスクロマン＞のテーマを表現している。

ストーリーの内容や、仕掛人たちの裏稼業遂行の際の意識などをシリーズ全体を通してみると、2つのテーマに同じ比重をおいたバランスのとれた作品作りがなされたといえる。

ーテーマとキャラクターの関係

「裏の仕事を稼業（ビジネス）と割り切って、頼み人への同情や殺す相手への怒りの感情をもたずに冷徹に仕事を遂行する」藤枝梅安は、＜ピカレスクロマン＞を体現するキャラクターといえる。それに対して「裏の仕事は単なる人殺しではなく、力なき頼み人たちの晴らせぬ恨みを晴らす行為であり、世のため人のためにならない悪党を始末する懲悪的な行為である」という認識をもった元締の音羽屋半右衛門は、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞を体現するキャラクターといえる。（もちろん厳密に各作品を分析すれば、藤枝梅安が頼み人への同情や悪人への怒りの感情をもって仕事を遂行する場合もあるし、音羽屋半右衛門が単なる商売として裏の仕事を引き受ける場合もあるだろう。）西村左内は明確にどちらかのテーマを体現しているとはいえないが、梅安と比較すれば＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞を体現しているキャラクターといえるかもしれない。なお、梅安の体現している＜ピカレスクロマン＞のテーマ（頼み人への同情や殺す相手への怒りの感情をもたずに行うビジネスライクな裏稼業を描いたテーマ）を＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞と表現しておく。

○ストーリーの特徴

このシリーズ全体を見渡した場合、仕掛人たちの裏稼業を描いたフィクション・ハードボイルド性の強いストーリーに重きがおかれている。ただ、フィクション・ハードボイルド性の強いストーリーの中にシリアスな人間ドラマの要素を加えることによって、3つのストーリー要素のバランスをはかっているといえる。

だが、次作の「必殺仕置人」と比べると顕著になるのだが、このシリーズはストーリー展開・筋書きの面白さを何よりも重視しているといえる。

○まとめ

テーマとしては、2つのテーマに同じ比重をおいたバランスのとれた作品作りがなされた。また、＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞という、後の「必殺仕置屋稼業」「必殺仕置屋人」「新必殺仕置人」で全面的に追及されることになるテーマがこの時点でうちだされていた。

主人公たちの裏稼業を描いたフィクション・ハードボイルド性の強いストーリー作りは、その後「助け人走る」「必殺必中仕事屋稼業」「必殺仕置屋稼業」「新必殺仕置人」に受け継がれていった。

必殺シリーズの2つのテーマ、3つのストーリー要素がすべてこのシリーズにおいて提示されており、文字どおり必殺シリーズの原点といえる。以後のシリーズは、このシリーズで提示されたテーマやストーリーのある部分を強調することによってそのシリーズの個性をうちだしていった。

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月26日公開したものを転載)

必殺仕置人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷2

2 作目・必殺仕置人

－2つのテーマの融合、シリアスドラマ重視のストーリー

○テーマの特徴

シリーズ第2弾、原作なしのオリジナル作品としては第1作にあたる「必殺仕置人」も、＜ピカレスクロマン＞＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞の2つのテーマから成り立っているが、このシリーズの制作姿勢は「必殺仕掛人」とは多少かわってきたため、テーマの比重・ストーリーの特徴ともに前作とはことなつたものとなっている。

当時のスタッフは、「必殺仕掛人」の高視聴率の原因は＜ピカレスクロマン＞のテーマよりは＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマにあると考えたらしく、このシリーズでは＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマが全面的に追及されることとなった。

設定においては、仲買人の存在を廃し、仕置人たちが直接頼み人から仕事を請け負うことによって、裏の仕事が単なる稼業ではなく、頼み人の晴らせぬ恨みを晴らす行為であることが強調されるようになった。

また仕掛人（特に藤枝梅安）は、頼み人への同情や殺す相手への怒りの感情を持たずクールに仕事を遂行したのに対し、仕置人は殺す相手への怒りの感情をむき出しにして仕置きを行っていた。このような仕置人たちの裏稼業は、「必殺仕掛人」での殺し屋としての裏稼業とはことなり、どちらかといえばテロリスト的な行為といえる。「悪人に対して怒りの感情をむき出しにして、自ら悪の上をゆく悪となって悪人たちを仕置きする、という意識をもった仕置人たちの裏稼業」を描いたテーマは、「必殺仕掛人」の＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞に対して、＜テロリスト型ピカレスクロマン＞と呼ぶことができるだろう。（ただし、本物のテロリストは何らかの目的をもって、誰からも報酬を受けず自主的に殺しを行うが、仕置人は頼み人から依頼を受け、相応の報酬を受け取って殺しを行っているので、殺し屋とテロリストの両義的あるいは中間にいる存在といえる。）

オープニングナレーションの「のさばる悪をなんとする、天の裁きは待つてはおれぬ、この世の正義もあてにはならぬ、闇に裁いて仕置する」というフレーズは、自ら悪となって悪を制裁する仕置人の＜テロリスト型ピカレスクロマン＞のテーマを的確に表現しているといえる。

また、＜ピカレスクロマン＞と＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマは矛盾していると同時に反比例の関係にあった。（＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマを強調すると、＜ピカレスクロマン＞のテーマが持つ背徳性・悪の魅力が薄まる、といったように。）

だが＜テロリスト型ピカレスクロマン＞のテーマはその中に2つのテーマを内包しているので、両者が正比例の関係になった。仕置人たちの行う仕置きは、懲悪的であり恨みを晴らすという要素のつよい行為でありながら、同時に法的にも倫理的にも許されない背徳的な悪の要素のつよい行為でもある。仕置きする相手が悪党であればあるほど、カタルシスドラマとしての懲悪性と

ピカレスクロマンとしての背徳性がつよまるという構造をもっている。（ただし、その中に＜カタルシスドラマ＞のテーマを内包している分、＜ピカレスクロマン＞としての背徳性は＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞よりも弱くなっている。）

ーテーマとキャラクターの関係

このシリーズのテーマ＜テロリスト型ピカレスクロマン＞が、＜ピカレスクロマン＞と＜カタルシスドラマ＞2つのテーマを内包していることを反映して、キャラクターの性格設定もバランスのとれたものとなっている。3人の仕置人の中で最も殺し屋的性格がつよい念仏の鉄は、＜ピカレスクロマン＞の背徳性を体現している。正義感がつよく、しばしば感情にまかせて悪人を仕置きしようとする棺桶の錠は、＜カタルシスドラマ＞の懲悪性を体現している。そして、屈折した正義感とドライな感情の両面をもった中村主水は、2つのテーマの両義性をもつ＜テロリスト型ピカレスクロマン＞を最もよく体現したキャラクターとなっている。

○ストーリーの特徴

前作の「必殺仕掛人」ではストーリー展開（筋書き）の面白さを重視した作品作りがなされていたが、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞により重きをおいたこのシリーズは、悪役の悪事をより濃密に描き、頼み人や被害者たちの悲しみの姿をよりリアルに描くことによって、クライマックスの仕置きシーンでのカタルシス感を強めるという姿勢がとられた（特に第7話頃からその姿勢が強調される）。

「必殺仕掛人」では仕事の依頼を受けた後のプロットがストーリーのメインとなっていたが、「必殺仕置人」では仕事の依頼がおこる前のプロット（悪事、依頼の原因となる事件や出来事）および被害者・頼み人たちの描写がストーリーのメインとなった。シリーズ全体の3分の2ちかくが「シリアスな人間ドラマ」であり（特に「必殺仕掛人」と比較すると「カタルシスドラマ」の比重が高い）、残りの3分の1ちかくがハードボイルド・フィクション色のつよい作品となっていた（フィクション性よりは、ハードボイルド性の方が高いという特徴もある）。ハードボイルド・フィクション色のつよい作品の場合も、その中にシリアスな人間ドラマの要素を盛り込んでいた点で、「必殺仕掛人」と対照的な作品となっていた。

○まとめ

「必殺仕置人」は「直接依頼型」の設定をとるなど、「必殺仕掛人」とはことなる基本フォーマットを生み出したが、テーマやストーリーの面でも前作とのちがいをうちだした。＜テロリスト型ピカレスクロマン＞という、プロの殺し屋を描いた前作とはことなるテーマを描き、ストーリーにおいては、仕事の依頼前のプロットを軸にしたシリアスな人間ドラマ中心の作品作りがなされた。＜テロリスト型ピカレスクロマン＞というテーマは、その後「暗闇仕留人」にわずかにその痕跡がみられるだけだが、「必殺仕置人」で確立したストーリー作りは、「暗闇仕留人」「必殺仕業人」「必殺商売人」を経て後期のシリーズに継承されていった。

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月27日公開したものを転載)

助け人走る

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷3

3 作目・助け人走る

ーピカレスクロマンの隠蔽、仕掛人型のストーリーに仕置人型の要素をミックス

○テーマの特徴

シリーズ第3弾「助け人走る」は、設定・キャラクター・ストーリー等「必殺仕掛人」の延長線上で製作されているが、テーマには若干の変更がみられる。元々「必殺仕掛人」放映当時からお金を貰って人殺しをするという＜ピカレスクロマン＞のテーマに対してかなりの批判があったそうであるが、ファンの間では有名な「必殺仕置人」放映時の殺人事件が原因となって、番組存続のために＜ピカレスクロマン＞のテーマを隠蔽するという方針がとられる（タイトルから必殺の文字が外れたのもそのためらしい）。

スタッフたちは苦肉の策として、助け人の裏稼業を「お金を貰って人助けをし、必要とあれば人殺しもする」という設定に変更した。「人助け」というテーマを全面に押し出すことによって、その背後にある＜ピカレスクロマン＞の要素を隠そうとしていたといえる。（ただし、スタッフたちは＜ピカレスクロマン＞のテーマを隠そうとしただけで、放棄したわけではないだろう。番組後半、新キャラクター龍の登場、第24話での為吉死亡以後は、＜ピカレスクロマン＞のテーマが徐々に表面に現れ始めている。）

このシリーズは、＜ピカレスクロマン＞のテーマを隠すために「人助け」という要素を全面にうちだし、それによって＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマが強調されるという特徴をもっているといえる。オープニングナレーションは、「人助け稼業」をそのまま表現したものとなっている。

ーテーマとキャラクターの関係

このシリーズは＜ピカレスクロマン＞のテーマを隠蔽した影響か、前作までのシリーズのようなテーマをキャラクターに反映させる手法がとられていない。中山文十郎も辻平内も、人助的な意識を持って裏の仕事を行ったり、稼業と割り切ったりと各回ごとに意識はばらばらである（キャラクターに魅力がないと言っているわけではないので、誤解しないようにしてほしい）。

だが元締の清兵衛は、仕掛人の元締同様＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞を体現し、途中参加の龍は＜ピカレスクロマン＞を体現しているといえる。

○ストーリーの特徴

テーマ以外は「必殺仕掛人」の延長線上で製作されたこのシリーズは、ストーリー的にも「必殺仕掛人」と同様の手法がとられ、助け人の裏稼業を描いたフィクション色のつよい作品が多い。ただ、裏の仕事が殺し以外のものもあるので、仕掛人にはなかったタイプのものも若干製作さ

れた。

また、「必殺仕置人」の影響か、「必殺仕掛人」に比べて悪役の悪事や被害者・頼み人の悲しみの姿の描写が多い。特に裏の仕事がそのままラストの殺しのシーンに結び付かない作品も多く、助け人の（殺し以外の）仕事の描写と「カタルシスドラマ（悪役の悪事や被害者・頼み人の悲しみの姿を描いたドラマ）」が同時進行するパターンのももかなりみられる。

プロットの的には助け人の裏稼業を描いたフィクション色のつよいストーリーがメインだが、シリアスな人間ドラマの要素も「必殺仕掛人」以上につよくなっている。「必殺仕掛人」の作品作りに、「必殺仕置人」的な要素を付け加えたシリーズといえる。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月27日公開したものを転載）

暗闇仕留人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷4

4 作目・暗闇仕留人

ー仕置人を継承したテーマとストーリー

○テーマの特徴

前作の「助け人走る」が「必殺仕掛人」の延長線上で制作されたのと同様、シリーズ第4弾となった「暗闇仕留人」は、設定・キャラクター・テーマ・ストーリーとも「必殺仕置人」の延長線上で制作されている。

「必殺仕置人」同様＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマに重きがおかれ、＜ピカレスクロマン＞のタイプも＜プロフェッショナル型＞ではなく＜テロリスト型＞となっている。

ただ、＜ピカレスクロマン＞のテーマを隠蔽・自主規制するという前作の方針はここでも受け継がれ、「必殺仕置人」にあった毒々しさはかなり薄められて、「必殺仕置人」よりはスマートで洗練された作風となっている。

オープニングナレーションは、「必殺仕掛人」「必殺仕置人」で表現されたテーマをより文学的な言葉で表している。「黒船このかた泣きの涙に捨て処なく、江戸はひとしく針地獄の様呈しおり候」の個所は、「必殺仕置人」の「この世の正義もあてにはならぬ」に対応している。「尽きせぬこの世の恨み一切、いかようなりとも始末の儀請け負い申し」は、「必殺仕掛人」の「晴らせぬ恨みを晴らし、許せぬ人でなしを消す」、「必殺仕置人」の「闇に裁いて仕置きする」に対応している（＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞を表現）。

また、「万に一つもしくじり有るまじく候」は、「必殺仕掛人」の「人知れず仕掛けて仕損じなし」に対応。「但し右の条々闇の稼業の定め書き、口外法度の仕留人」は、「必殺仕掛人」の「但しこの稼業江戸職業づくしにはのっていない」、「必殺仕置人」のエンディングナレーションに対応している（＜ピカレスクロマン＞を表現）。

ーテーマとキャラクターの関係

「必殺仕置人」の＜テロリスト型ピカレスクロマン＞を継承したこのシリーズは、やはり中村主水がそのテーマを体現するキャラクターとなっている。第1話で、主水が再会した半次とおきんに裏稼業再開の決意を語るセリフにそのことが表れている。

しかし＜ピカレスクロマン＞のテーマを自主規制するという姿勢が続いているために、糸井貢、大吉のキャラクターには、テーマとの関連がそれほどつよくはみられない。助け人の中山文十郎、辻平内同様に、各作品ごとに人助的な意識を持ったり、稼業として割り切ったりして裏の仕事を行っている。

また、中村主水も仕置人の時ほどは感情を表に出さず、淡々と仕事をしている姿が増えている。これはテーマが表に出ていないために、仕留人たちが「義賊・人助的な存在」なのか「殺し屋」なのか、仕置人のような「自ら悪となって悪を裁く存在」なのかがはっきりしていないた

めであろう。（後から振り返れば、主水が仕置人から「プロの殺し屋」へと変貌を遂げる過渡期にいたことがわかるが。）

○ストーリーの特徴

「必殺仕置人」の延長線上で作品を制作するという姿勢は、ストーリー作りにも反映されている。悪役の悪事や仕事の依頼の原因となる事件・出来事、被害者・頼み人の悲しみの姿を描いたプロットを軸にした「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」が全体の3分の2近く、残りの3分の1近くがフィクション・ハードボイルド性のつよい作品となっている。（仲買人の存在しない「直接依頼型」の設定のシリーズは、仕事の依頼を受けた後のプロットを描きづらいという理由もある。）

ただ、「必殺仕置人」がクライマックスの仕置のシーンにおけるカタルシス効果を重視しすぎて、筋書き（ストーリー展開）の面白さを軽視していた側面があったので、このシリーズは筋書きの面白さも留意して制作されている。なお、フィクション・ハードボイルド性のつよい作品にもシリアスな人間ドラマの要素を盛り込んでいくという点は、「必殺仕置人」と同様である。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月28日公開したものを転載）

必殺必中仕事屋稼業

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷5

5 作目・必殺必中仕事屋稼業

ーピカレスクロマンの復権、仕掛人を継承したテーマとストーリー

○テーマの特徴

「助け人走る」「暗闇仕留人」と2作続けて<ピカレスクロマン>のテーマを薄めた作品が制作されたが、このシリーズから再び<ピカレスクロマン>のテーマが強調されるようになった。

ナレーションにそのことが表れている。このシリーズのナレーションには、それまでのシリーズにあった「晴らせぬ恨みを晴らす」「悪人たちを制裁する」という<カタルシス（懲悪）ドラマ>を表現するセリフがなくなった。オープニングナレーションのセリフ「とにかくこの世は一天地六、命ぎりぎり勝負をかける、仕事はよろず引きうけましょう」は、博打のような緊張感をもった裏稼業にとりくむ仕事屋たちの心情を表現しているし、エンディングナレーションのセリフ「どうせあの世も地獄と決めた、命がっさい勝負にかけて、燃えてみようか仕事屋稼業」は<ピカレスクロマン>のテーマを表現している。

ただし、ナレーションには<カタルシス（懲悪）ドラマ>の要素はなく、<ピカレスクロマン>のテーマしかみられないが、作品自体は「必殺仕掛人」同様2つのテーマに同じ比重をおいて制作されている。むしろ、元締のおせいが頼み人から報酬を受け取らずに仕事を引き受けるケースがあったこと、裏の仕事が殺しだけに限らず、金のない者・力のない者たちを助けるために様々な依頼を引き受けていることを考慮すると、「必殺仕掛人」よりも<ピカレスクロマン>のテーマは薄いといえるかもしれない。だが、<ピカレスクロマン>と<カタルシス（懲悪）ドラマ>、背反する2つのテーマに基づいて作品作りを行うという初期の姿勢は復活されている。

ーテーマとキャラクターの関係

「必殺仕掛人」にみられた、元締が<カタルシス（懲悪）ドラマ>を体現し、殺し屋が<ピカレスクロマン>を体現するという方針が再現された。元締のおせいは、「テーマの特徴」で既に述べたように「義賊・人助け」的な意識のつよい<カタルシス（懲悪）ドラマ>を体現するキャラクターである。それに対して半兵衛、政吉の2人は、「人助け」や「悪人を制裁する」という意識で裏稼業を行っているわけではなく、「生きるか死ぬか。勝つか負けるか」といった裏の仕事の博打性に惹かれている<ピカレスクロマン>を体現したキャラクターとなっている。

○ストーリーの特徴

このシリーズは、キャラクターの個性、殺し技、映像（作風）などはそれまでのシリーズにない独創的なものになっているが、設定、テーマ、ストーリーは「必殺仕掛人」の流れを継承している。そのためストーリーは、仕事の依頼を受けた後の仕事屋たちの裏稼業を描いたフィクション・ハードボイルド性のつよい作品がメインとなっている。

また、フィクション・ハードボイルド性のつよいストーリーの中にシリアスな人間ドラマの要素を盛り込むという点も「必殺仕掛人」と共通している。ただ、殺し以外の仕事も引き受けているため、探偵稼業を描いたようなストーリーも若干みられる（このあたりは、「助け人走る」との共通性がみられる）。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月28日公開したものを転載）

必殺仕置屋稼業

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷6

6 作目・必殺仕置屋稼業

ーピカレスクロマンの全面的追求、フィクション重視のストーリー

○テーマの特徴

シリーズ第2弾の「必殺仕置人」では、「頼み人の晴らせぬ恨みを晴らす」「法の網をくぐってはびこる悪を裁く」といった＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマに、より重きがおかれた。では、シリーズ第1弾の「必殺仕掛人」では2つのテーマ、どちらに重きをおきたかったのだろうか。当初から2つのテーマに同じ比重をおこうとしていたのかもしれない。だが、これは筆者の勝手な推測にすぎないのだが、スタッフたちの本来の意図は＜ピカレスクロマン＞を作ることにあつたのではないだろうか。人殺しを主人公にしたことに対して風当たりがつよいことを知りながら、シリーズ第5弾の「必殺必中仕事屋稼業」で再び＜ピカレスクロマン＞のテーマを強調したことがその証拠になるのではないだろうか。

「必殺仕掛人」では、元締の音羽屋半右衛門が「仕掛人は人殺しだが、世のため人のためにならない奴しか殺さない」「仕掛人はただの殺し屋ではなく、弱いものたちの晴らせぬ恨みをかわりに晴らす存在である」ことを必要以上に強調していた。半右衛門に＜ピカレスクロマン＞のテーマを否定するセリフを喋らせていたのは、そうすることによって作品が勧善懲悪時代劇であるかのように思わせて、番組に対する非難や批判をかわそうとしたのではないだろうか。

それに、カタルシスドラマ・懲悪ドラマを作りたいのなら、主人公たちが頼み人から報酬を受け取る必要もないし、主人公たちを闇の世界の住人にする必要もないだろう。

「必殺仕掛人」制作時は、ピカレスクロマンを作り続けるために、その要素を自主規制・自己否定しなければならないという自己矛盾に直面していたといえる。そして、スタッフたちが、外部の批判を気にせずに、＜ピカレスクロマン＞のもつ背徳的な魅力・要素を全面的に追及したのが、シリーズ第6弾「必殺仕置屋稼業」である。

必殺シリーズにおける＜ピカレスクロマン＞のテーマは、「必殺仕掛人」での＜プロフェッショナル型＞と「必殺仕置人」での＜テロリスト型＞、2つのものがあるが、＜ピカレスクロマン＞としての背徳性は、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマを内包している＜テロリスト型＞よりも、＜プロフェッショナル型＞の方がつよい。＜ピカレスクロマン＞のテーマに重きをおいた本作では、当然＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞のテーマが追及されることになる。

本作のオープニングナレーションでは、「必殺必中仕事屋稼業」同様、「晴らせぬ恨みを晴らす」「許せぬ人でなし（法の網をくぐってはびこる悪）を裁く」という＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞＜テロリスト型ピカレスクロマン＞を表現するセリフは語られていない。「こんち日柄もよいようで、あなたのお命もらいます」と裏稼業に臨む殺し屋たちの心情が語られ、「人のお命いただくからは、いずれ私も地獄道」と裏稼業に生きる者の末路が語られる。お金を貰って人

様のお命を頂戴する、闇の世界の住人たちを描く〈プロフェッショナル型ピカレスクロマン〉のテーマを簡潔に表したナレーションとなっている。

ーテーマとキャラクターの関係

本シリーズは中村主水3度目のレギュラー出演となったが、作品のテーマが〈テロリスト型ピカレスクロマン〉から〈プロフェッショナル型ピカレスクロマン〉にかわったことをうけて、主水の性格設定にも変化がみられた。

このシリーズでの主水は、それまでのような「悪人たちを自ら悪となって仕置きする」という意識はもたず、裏の仕事を単なるビジネスとして行う「プロの殺し屋」へと変貌を遂げた。裏稼業の人間としては、それまでの甘さが払拭され、より凄みを感じさせるキャラクターになったといえる。

第1話で裏稼業の再開を決意した主水が、仲買人のおこうから仕事料のみを受け取り、おこうが渡そうとした頼み人の依頼文の受け取りを拒否したこと、第5話で仕事の依頼をするおこうの「くどくど言わんと引き受けたらどうだす。人助けでっせ。」というセリフに対して、主水が「人助けなんかする気はねえ。これは商用だ。」と受け答えしたことなどは、主水のキャラクターの変化を視聴者に示す格好のメッセージとなっている。

そして、〈ピカレスクロマン〉のテーマを全面的に追及するという制作姿勢を受けて、主水以外の殺し屋、市松、印玄ともに金のために稼業（ビジネス）として殺しを行う〈プロフェッショナル型ピカレスクロマン〉を体現するキャラクターとなっている。仲買人のおこう、情報収集係の捨三はともに、人助けをする、悪人たちを制裁するという意識をもった〈カタルシス（懲悪）ドラマ〉を体現するキャラクターであるが、彼らが作品のテーマを象徴する比重は「必殺仕掛人」の半右衛門や「必殺必中仕事屋稼業」のおせいほど高くはなく、また、おこう、捨三ともにお金に細かいキャラクターとして描かれているので、〈カタルシス（懲悪）ドラマ〉の要素はその分薄くなっている。

○ストーリーの特徴

このシリーズは、「必殺仕掛人」で元締音羽屋半右衛門の妻おくらを演じた中村玉緒が、おくらを彷彿させるキャラクターで仲買人として出演していることにも示されているように、設定・映像（作風）ともに「必殺仕掛人」の延長線上で制作されている。いわば、「必殺仕掛人」の作品世界に中村主水というキャラクターを登場させることによって、「必殺仕掛人」と「必殺仕置人」の世界を融合させた作品だといえる。

ストーリーにおいても、「必殺仕掛人」の路線が継承され、仕置屋たちの裏稼業を描いたフィクション・ハードボイルド性のつよい作品作りがなされている。ただ、「必殺仕掛人」や「必殺必中仕事屋稼業」が、フィクション・ハードボイルド性のつよいストーリーの中にシリアスな人間ドラマの要素を盛り込んでバランスのとれた作品作りをしていたのに対し、このシリーズでは、シリアスな人間ドラマの要素を極力排し「フィクション（つくりもの）」としての面白さを全面的に追及した点に特徴がある。

その理由の1つは、シリアスな人間ドラマの要素を入れると必然的に「頼み人の恨みを晴らす、悪人たちを消す」といった＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞の要素が強調され、＜ピカレスクロマン＞のテーマが薄れるからであろう。もう1つの理由は、「必殺仕掛人」の路線を継承した作品もすでに「助け人走る」「必殺必中仕事屋稼業」に継ぎ4作目となり、前作と同じスタイルではマンネリ化のおそれがあったからだろう。（「必殺必中仕事屋稼業」途中のネット転換の影響による視聴率低下を挽回させるために、「フィクション（エンターテイメント）」としての面白さを追求したのかもしれない。）

いずれにせよ、「必殺仕置屋稼業」はメインのストーリー自体が殺し屋たちの裏稼業を描いたフィクション色のつよいものであるのに加えて、本筋に関係のない遊びの場面の描写にも本筋同様の力が加えられた。コミカルな表現も（他のシリーズと比較すれば）過剰ともいえるくらい強調され、殺しのシーンも毎回手をかえ品をかえ（大仕掛けのものから小細工を施したものまで）様々な趣向が凝らされた。

○まとめ

必殺シリーズの歴史ではじめて＜ピカレスクロマン＞のテーマに重きがおかれた点で画期的な作品となっている。ストーリーにおいても「フィクション」としての面白さを全面的に追及し、テーマ・ストーリーとも特定の要素に絞り込んだ作品作りがなされた。

それまでのシリーズが2つのテーマ、3つのストーリー要素のバランスを考慮していたことを考えると特徴的である。そのため、筆者のような「ピカレスクロマン、フィクション」の要素に魅力を感じているファンにとっては大傑作だが、「カタルシス（懲悪）ドラマ、シリアスドラマ」の要素に惹かれているファンにとっては物足りない、あるいはつまらない作品になっているだろう。（ちなみに80年代以降「必殺仕置屋稼業」に対して浴びせられた罵倒や非難は、ほとんどが「カタルシス（懲悪）ドラマ、シリアスドラマ」に魅力を感じているファンからのものだろう。）

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月29日公開したものを転載）

必殺仕業人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷7

7 作目・必殺仕業人

ーテーマとストーリーのねじれ現象、ピカレスクロマン・シリアスドラマ重視の制作姿勢

○テーマの特徴

ーテーマとキャラクターの関係

中村主水の続投となった本シリーズ「必殺仕業人」も、前作同様＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞のテーマに重きがおかれている。そのため、主水、赤井剣之助、やいと屋又右衛門3人の仕業人がいずれも金のために稼業として殺しを行う＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞を体現するキャラクターとなっている。

前作でも、一匹狼的なキャラクター市松の加入によって、グループ内に緊迫した雰囲気は漂っていたが、本シリーズは前作以上に人間関係がシビアでドライな殺伐としたものになり、この点にもピカレスクロマンのテーマが反映されていた。

○ストーリーの特徴

このシリーズは、テーマは「必殺仕置屋稼業」同様＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞に重きがおかれているが、設定・ストーリーは「必殺仕置人」「暗闇仕留人」の流れを継承している（仲買人が存在せず、殺し屋が頼み人から直接仕事の依頼を受ける「直接依頼型」の設定）。

「直接依頼型」の設定を反映して、ストーリーは悪役の悪事や頼み人・被害者の姿を描いたプロットが主流を占めた。「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」が全体の3分の2、残る3分の1が「必殺仕置屋稼業」の延長線上の「フィクション」「ハードボイルド」としての面白さを追及した作品となっている。

○テーマとストーリーの不協和音

＜ピカレスクロマン＞のテーマは、仕事の依頼を受けた後の裏稼業を描いたプロットと密接な関係にあり、ストーリー的には「フィクション」「ハードボイルド」と相性がよい。＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマは、悪役の悪事や頼み人・被害者の姿を描いたプロットと密接な関係にあり、ストーリー的には「シリアスな人間ドラマ」と相性がよい。

しかし、このシリーズはテーマは＜ピカレスクロマン＞に重きをおきながら、ストーリーは「シリアスな人間ドラマ」に重きがおかれている点に特徴がある。オープニングナレーション全体が、「暗闇仕留人」のナレーション「黒船このかたー（略）ー針地獄の様呈しおり候」の部分に相当する内容になっている（悪人たちがのさばり、庶民が苦しんでいる不条理な社会の様子）。これは、「必殺仕業人」のストーリーが「暗闇仕留人」同様シリアスな人間ドラマ、被害者たちの悲しみの姿を描くことに重きがおかれていることを表している。しかし、「暗闇仕留人」の

ナレーションではその後、恨みを晴らすことが表現されているが、「必殺仕業人」のナレーションでは「晴らせぬ恨みを晴らす」「悪人たちを制裁する」という内容は語られていない。これは、仕業人たちの行う殺しが金のために行うビジネスライクなものであり、義賊・人助け的な行為ではないことを表しているといえる。

「必殺仕置人」では、悪事や被害者たちの悲しみの姿を描いたシリアスな重く暗い話が描かれているが、クライマックスで仕置人たちが「頼み人の恨みを晴らす」「悪人たちを制裁する」という明確な意志をもって殺しを行うために、視聴者たちは番組を観終わった後カタルシス感・解放感を感じることができる。

また、「必殺仕掛人」「必殺仕置屋稼業」ではビジネスとしてのドライで背徳的な裏稼業が描かれているが、ストーリー自体はフィクション・ハードボイルド性の高いエンターテインメントとして面白い話が展開されているので、番組を観終わった後には爽快感が残ることが多い。

それに対して、「必殺仕業人」ではシリアスな重く暗い話が展開し、その上稼業としてのドライで背徳的な殺しが行われるので、「晴らせぬ恨みを晴らす」解放感、「悪人たちを制裁する」爽快感は得られにくい。ストーリー、テーマともにヘヴィーな要素が強調された、全シリーズ中でも最も重くハードな作品といえる。

○まとめ

前作「必殺仕置屋稼業」のストーリーがフィクション重視で、シリアスな人間ドラマの要素を軽視していたので、このシリーズでは一転シリアスドラマ重視の作品作りがなされた。シリアスドラマ重視のシリーズは、テーマとしては<カタルシス（懲悪）ドラマ>に重きがおかれていたのに、このシリーズはテーマにおいては<ピカレスクロマン>、ストーリーにおいては「シリアスな人間ドラマ」に重きをおいた珍しい作品となった。

そのため、シリアスな人間ドラマが好きなファンには評価が高いが、「晴らせぬ恨みを晴らす」「悪人たちを制裁する」といった<カタルシス（懲悪）ドラマ>としての解放感を求めているファンにはそれほど高く評価されていないように見える。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月29日公開したものを転載）

必殺からくり人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷 8

8 作目・必殺からくり人

－独創的な制作姿勢、テーマの2次化現象

○テーマの特徴

シリーズ第8弾となった本シリーズ「必殺からくり人」は、設定・キャラクターともにそれまでの基本フォーマットに拘束されない自由で独創的な制作姿勢で作られているが、テーマとストーリーにおいても他のシリーズにはみられない特徴がある。

このシリーズに関しては、1987年ごろ発売された「サウンドトラック」LPの解説と、1996年刊行の『さらば必殺！裏稼業の凄い奴ら』（フットワーク出版社）所収の論文「研究・必殺からくり人」が参考になった。（両方とも現在は入手困難なはずである。筆者が初めて「必殺からくり人」を全話通してみたのは、1997年テレビ埼玉（現テレ玉）で放送された時である）。

必殺シリーズは、「闇の世界の住人の裏稼業を描いたピカレスクロマン」と「頼み人の晴らせぬ恨みを晴らし、許せぬ悪を消すカタルシス（懲悪）ドラマ」、2つのテーマから成り立っていると繰り返し述べてきたが、このシリーズはこの2つのテーマどちらにも重きがおかれていない。メインライター早坂暁の描いた「必殺のテーマや基本フォーマット」にとらわれない自由なストーリー自体が全面におしだされている。

＜ピカレスクロマン＞に重きをおいた作品では、主人公たちの裏稼業を描いたストーリーのクライマックスとして、殺しのシーンが重要になる。一方、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞に重きをおいた作品では、クライマックスの殺しのシーンの描写により視聴者にカタルシス感・解放感をもたらすことが一番の目的となっている。

しかし「必殺からくり人」は脚本そのもの、ストーリーそのものが作品のメインとなり、殺しのシーンはおまけ（一種のファンサービス）として描かれている回が多い。（「ウルトラセブン」で、SFタッチのストーリー（脚本）そのものがメインとなり、怪獣・宇宙人との戦いがファンサービス用の付けたしとなっている回がかなりあることを想起させる。）

また、仕事の依頼自体ない回がかなりあることも2つのテーマから自由に作品を作っていることの証拠だろう。2つのテーマを意識せずに書かれたストーリーがメインテーマとなり、＜ピカレスクロマン＞＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞は2次的なテーマになったといえる。

ただ、あくまでも2次的なテーマにすぎないが、2つのテーマどちらが比重が高いかとみれば、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞の要素の方がつよいとはいえる。第1話で元締の壺屋蘭兵衛が、金をもっていない頼み人からは頼み料を受け取らずに仕事を引き受けていると語っていること、シリーズ中の数作品で花乃屋仇吉が報酬なしで仕事を引き受けている点、最終回で仇吉が「私たちは涙以外とは手を組まない」と語っていることにそのことがうかがえる。特にこのシリーズでは、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマのうち、悪人を制裁するという懲悪的要素よりも

、晴らせぬ恨みを晴らすという要素に重きがおかれているように見える。なお、＜ピカレスクロマン＞のテーマは、主人公たちが島抜けをしたお尋ね者であり、幕府の眼を避けながら生きているという点に活かされている。

○ストーリーの特徴

＜ピカレスクロマン＞に重きをおいたストーリーは、「依頼を受けた後の仕事の遂行過程を描いたプロット（ピカレスクプロットと表記）」がメインとなり、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞に重きをおいたストーリーは、「悪役が悪事や、仕事の依頼の原因となる事件や出来事、被害者・頼み人たちの姿を描いたプロット（カタルシスプロットと表記）」がメインとなっていることも何度も述べてきたが、両テーマに重きをおいていないこのシリーズはストーリーの面でも従来のパターンを踏襲していない。

「ピカレスクプロット」中心の作品、「カタルシスプロット」中心の作品、両プロットとは別のプロット中心の作品等一作ごとに様々なパターンのものが制作された。

ストーリーの要素という点では、筋書き（ストーリー展開）の面白さを重視したフィクションの要素と、シリアスな人間ドラマの要素、2つに同じぐらいの比重がおかれたバランスのとれた作品作りとなっている。ハードボイルドの要素は、敵組織との抗争を描いたエピソードとして描かれていた。

○感想

テレビ情報誌の読者投稿欄で、この作品のことを「必殺らしくない」と評した意見を目にしたことがある。それは、この作品が必殺シリーズの2つのテーマを重視していないことからくる自然な感想と思われる。

作品の完成度の高さとは裏腹に、関東地方では長い間再放送にも恵まれず、80年代、90年代は埋もれた名作的な扱いを受けていた。この作品は、必殺シリーズとは別の独立した作品として制作された方が正当な評価を受けていたかもしれない。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月30日公開したものを転載）

必殺からくり人血風編

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷9

9作目・必殺からくり人血風編

ーシリアスドラマ重視のストーリー

○テーマとストーリーの特徴

前作「必殺からくり人」は＜ピカレスクロマン＞＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞両テーマが2次的なものとなっていたが、シリーズ第9弾の本作「必殺からくり人血風編」も2つのテーマをつよく反映して制作されているわけではない。特に＜ピカレスクロマン＞の要素はほとんどない。（ただし、映像的には闇の世界を感じさせる耽美的な雰囲気があった。）

「頼み人から依頼を受けて裏の仕事を遂行する」という必殺シリーズ特有のパターンが、設定にもストーリーにもほとんど反映されていないのがこの作品の特徴である。（そのことを、パターンにとらわれない斬新な制作姿勢と肯定的に評価するかは人によって判断がわかるだろう。ちなみに前作「必殺からくり人」にも同様の傾向はあった。）

番組開始当初、元締のおりくが「お金にならない仕事はお断り」と言っていたが、結局は報酬なしで殺しを行った回の方が多かった。また、からくり人たちの裏の仕事に対する意識も、人助け的な意識なのか、ビジネスとしての殺し屋的な意識なのか不明な回が多い。このシリーズ自体が、次作の「新必殺仕置人」の撮影が遅れたために急遽穴埋めとして作られたそうだから、テーマやストーリーをどうするか、十分に企画を練り上げる余裕がなかったのかもしれない。

このシリーズのそれまでのシリーズとのちがいは、ストーリーの特徴にみられる。このシリーズでは「ピカレスクプロット（仕事の依頼を受けた後の裏稼業を描いたプロット）」に基づいた作品はほとんどなく、フィクション、ハードボイルド性のつよいストーリーもほとんどない。大部分が「カタルシスドラマ（悪役の悪事、被害者・頼み人の悲しみの姿を描いたドラマ）」「シリアスドラマ」である。筆者の個人的感想は、「必殺以外のテレビ時代劇、勧善懲悪時代劇みたいだな。」というものである（同様の感想をインターネット上でみかけたこともある）。

表面的・表層的に必殺っぽい雰囲気を漂わせていながら、中身は「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」である点など、一部のファンが必殺イミテーション番組と呼んでいる作品（「影同心」など）にちかいかもしい。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月30日公開したものを転載）

新必殺仕置人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷10

10作目・新必殺仕置人

ーピカレスクロマンとしての最終作、ハードボイルド性の強調

○テーマの特徴

「必殺仕置屋稼業」以降、主水シリーズは<ピカレスクロマン>重視の作品作りがなされてきたが、シリーズ第10弾「新必殺仕置人」も<プロフェッショナル型ピカレスクロマン>のテーマに重きをおいて作品が制作されている。念仏の鉄の再登場をうけて番組タイトルは「新必殺仕置人」となっているが、設定もテーマもストーリーも「必殺仕置人」とは異なっており、むしろ「必殺仕掛人」「必殺仕置屋稼業」の路線を継承した作品といえる。特に虎の会という殺し屋組織や、仕置人たちの監視役死神を登場させたことによって、表の世界では奉行所の眼をかいぐり、裏の世界では死神の監視下で仕事を遂行しなければならないため、<ピカレスクロマン>のもつハードボイルド性が最も強調された作品となっている。

オープニングナレーションは「必殺仕置人」のものを再使用しているが、「必殺仕置人」のナレーションは<テロリスト型ピカレスクロマン>のテーマを表現したもので、「新必殺仕置人」のテーマや特徴をとらえたものとはなっていない。必殺シリーズのオープニングナレーションは、各シリーズの特色を巧みにとらえたものが多かったが、このシリーズはオープニングナレーションと作品のテーマとが乖離した珍しいシリーズとなってしまった。

ーテーマとキャラクターの関連

<プロフェッショナル型ピカレスクロマン>重視の制作姿勢を反映して、このシリーズに登場する3人の仕置人、中村主水、念仏の鉄、巳代松は皆<プロフェッショナル型ピカレスクロマン>を体現するプロの殺し屋として描かれている。「必殺仕置人」時代から<ピカレスクロマン>のテーマを体現していた念仏の鉄はもちろんのこと、表の生活では善人キャラの巳代松も、裏の仕事に対しては頼み人への同情や殺す相手への怒りの感情を持ち込まない、裏稼業をビジネスと割り切ったキャラクターとなっている。

○ストーリーの特徴

このシリーズは、ストーリー的には2種類のタイプのものから成り立っている。1つ目のものは、「必殺仕掛人」「必殺仕置屋稼業」を継承した制作姿勢をうけて「ピカレスクプロット（仕事の依頼を受けた後の裏稼業を描いたプロット）」に基づいたフィクション、ハードボイルド性のつよい作品（フィクション色よりは、ハードボイルド色の方がつよくなっている）。

もう1つのものは、「必殺仕置人」「暗闇仕留人」「必殺仕業人」でみられた「カタルシスドラマ（悪役の悪事、被害者・頼み人の悲しみの姿を描いたドラマ）」「シリアスドラマ」。

シリーズ全体を見渡すと両タイプのものがほぼ半分ずつ制作されている。（結果的には初期

シリーズの集大成といった感じで、必殺シリーズの2つの系譜を両方受け継いだ作品になったと評価することもできる。)

なお、ハードボイルド色のつよい作品が半数ちかくを占めるシリーズは他にはないので、筆者はこのシリーズの最大の特徴はハードボイルド性の高さにあるとみている。

○まとめ

全部で30作以上ある必殺シリーズの作品群の中でも、＜ピカレスクロマン＞のテーマが重視されたのは「必殺仕置屋稼業」「必殺仕業人」「新必殺仕置人」の3作品だけである。(筆者はこの3作品を「ピカレスクロマン3部作」と名付けている。)

ストーリー的には「必殺仕置屋稼業」はフィクション重視、「必殺仕業人」はシリアスな人間ドラマ重視、「新必殺仕置人」はハードボイルド強調と、各シリーズがそれぞれ必殺シリーズの3つのストーリー要素の1つを象徴しているといえる。

また、「新必殺仕置人」のエンディングを飾る「愛情無用」「解散無用」の2作は、このシリーズのラストを飾るだけでなく、5年間10作品に渡って作られてきた「ピカレスクロマンとしての必殺シリーズ」を締めくくる作品としても位置付けられる。(特に次作の「新必殺からくり人」以降、スタッフがピカレスクロマンのテーマを放棄したために一層その感がつよい。)

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年4月30日公開したものを転載)

新必殺からくり人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷11

11作目・新必殺からくり人

ーピカレスクロマンの放棄、カタルシスドラマに基づいた作品制作

○テーマの特徴

シリーズ第11弾「新必殺からくり人」は、殺し旅という大胆な設定、錦絵に殺す相手を書き込むという斬新なアイデアを盛り込んでマンネリ化の防止に努めているが、テーマの点では必殺シリーズの歴史の中で最も重要な転換が行われた。それは、このシリーズ以降スタッフたちは<ピカレスクロマン>のテーマを放棄してしまったということである。（ただし、「必殺仕置屋稼業」以降、主水シリーズは<ピカレスクロマン>が重視され、非主水シリーズは相対的に<カタルシス（懲悪）ドラマ>が強調されてきたので、スタッフが<ピカレスクロマン>のテーマを放棄したことがはっきりしたのは次作の「必殺商売人」からである）。

オープニングナレーションも「恨みつらみを晴らす」というテーマが表現され、からくり人たちも<ピカレスクロマン>ではなく<カタルシス（懲悪）ドラマ>を体現するキャラクターとなっている。

そして、からくり人たちの裏稼業自体が「プロの殺し屋による金のための仕事」ではなく、頼み人の恨みを晴らす行為となっていた。主人公たちの裏の仕事が「お金を貰って人様のお命を頂戴する行為」から「お金を貰って晴らせぬ恨みを晴らす行為」へと転換したといえる。

初期のシリーズでは、「お金を貰って人様のお命を頂戴する裏稼業の人間たちを描く」というテーマと、「晴らせぬ恨みを晴らし、許せぬ悪人たちを制裁する」というテーマ、2つの矛盾・背反するテーマに基づいて作品が制作されていたが、このシリーズ以降必殺のテーマは「お金を貰って晴らせぬ恨みを晴らす裏稼業の人間たちの姿を描く」ものになった。主人公たちの裏の仕事が「殺し屋稼業」ではなく、「復讐代行業」へと変質したといえる。

○ストーリーの特徴

本作は殺し旅という新しい設定がとられたために、ストーリー作りもそれまでのスタイルとは若干異なったものとなった。従来の「江戸定着型」の設定では、主人公たちの日常生活が描かれていて、それがストーリー作りにバリエーションをもたらしていたが、殺し旅の設定では主人公たちの果たす役割が限られてしまうため、ストーリーの幅は狭まってしまったといえる。

このシリーズでは、「カタルシスプロット（悪役の悪事、被害者の悲しみの姿を描いたプロット）」とからくり人たちの密偵活動が同時進行で描かれる構造の作品が多く、ストーリーの要素は「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」が大半であった。（第2話の「戸塚」は例外的にフィクション色のつよい作品であった。）

○感想

作品を面白くしようとする創意工夫は感じられるが、内容的にはシリーズの長期化によるマンネリ化が感じられる。テーマ的には＜ピカレスクロマン＞のテーマを放棄したことにより、それまでのシリーズにあったダイナミズムが失われた。また、ストーリー的にはワンパターン化がみられる。

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年5月1日公開したものを転載)

必殺商売人

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷12

12作目・必殺商売人

ーカタルシスドラマに基づいた作品制作、シリアスドラマ重視のストーリー

○テーマの特徴

「新必殺からくり人」の項で既に述べたように、前作以降スタッフたちは＜ピカレスクロマン＞のテーマを放棄し、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマに基づいた作品作りをしているが、シリーズ第12弾「必殺商売人」においてもこの方針は継承された。必殺シリーズは、主水シリーズ・非主水シリーズ問わずすべて＜カタルシスドラマ＞に基づいて制作されるようになったといえる。

ーテーマとキャラクターの関係

さて、スタッフは＜ピカレスクロマン＞のテーマを放棄し、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞に基づいた作品作りをしていると述べたが、このシリーズに登場した中村主水は、「新必殺仕置人」までと同様＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞を体現した「プロの殺し屋」として描かれていた。

このシリーズのテーマ・＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞は残る2人の商売人おせい・新次が体現している。おせい・新次の2人は、裏の仕事をたんなる人殺しではなく「力のない者たちの晴らせぬ恨みをかわりに晴らす行為」だと考えていて「義賊・人助け」的なキャラクターとして描かれていた。

主水と、おせい・新次という裏稼業に対して正反対の価値観をもつものが手を組んだために、考え方の違いから生じる両者の葛藤がドラマを盛り上げる効果的な要素となった。（「必殺仕置人」での梅安と左内、「必殺仕置人」での主水と錠の対立の再現といえる。）

だが、中村主水というキャラクターにとっては、このシリーズは重大な転換点となった。それまでの主水は、「必殺仕置人」「暗闇仕留人」時代の＜テロリスト型ピカレスクロマン＞、「必殺仕置屋稼業」から「新必殺仕置人」時代の＜プロフェッショナル型ピカレスクロマン＞と、自身が出演するシリーズのメインテーマを体現するキャラクターとなっていた。

しかし、「必殺商売人」においては、このシリーズのテーマを体現するおこう・新次に対するアンチテーゼとして描かれている。いわば、シリーズのテーマを体現するキャラクターからアンチテーゼを体現するキャラクターへと格下げされてしまったといえる。それでも、アンチテーゼとしてでも存在価値があったこのシリーズはまだよかったが、これ以後の主水はシリーズのテーマとは無関係な、視聴率確保のために登場させられる形式的なキャラクターになってしまったといえる。

ーサブタイトル「江戸プロフェッショナル」について

このシリーズは「江戸プロフェッショナル・必殺商売人」とサブタイトルにプロフェッショナルという言葉が用いられている。スタッフたちがどのような意図でこの言葉を使用したのかはわからないが、少なくとも「頼み人への同情や悪人への怒りの感情をもたず、ビジネスとして冷徹に殺しを行うプロの殺し屋」という意味で使用しているのではないことだけは確かだろう。

＜ピカレスクロマン＞のテーマを放棄して、主人公たちを庶民の味方・懲悪者として描くようになった時期にプロの殺し屋を連想させるサブタイトルをつけるのは、筆者の立場からは皮肉にしかみえない。「頼み人の晴らせぬ恨みを晴らすプロフェッショナル、悪人たちを処刑するプロフェッショナル」という意味でサブタイトルをつけたのかもしれないが、何も考えずに語感がいいからとつけただけかもしれない。

○ストーリーの特徴

設定において「必殺仕置人」の流れを継承しているこのシリーズは、ストーリー的にも「必殺仕置人」の路線を継承している。「カタルシスプロット（悪役の悪事、仕事の依頼の原因となる事件・出来事、頼み人・被害者の悲しみの姿を描いたプロット）」に基づいた「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」が全体の3分の2、残りの3分の1が「必殺仕置屋稼業」の延長線上の「フィクション・ハードボイルド」としての面白さを追求したものとなっている。（この作品構成は「必殺仕置人」と同じになっている。）

○まとめ

このシリーズは、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞重視のテーマ、「シリアスな人間ドラマ」重視のストーリーといった点で、「必殺仕置人」「暗闇仕留人」との共通点が多い。ただ、「必殺仕置人」「暗闇仕留人」には＜ピカレスクロマン＞の要素もあったが、このシリーズにおける＜ピカレスクロマン＞の要素は、商売人たちが頼み人から報酬を受け取って仕事をしている点のみだといえる。

だから、このシリーズに対する評価は＜ピカレスクロマン＞の要素の稀薄さをどう感じるかによってことになってくる。初期シリーズの＜ピカレスクロマン＞のテーマに魅力を感じていたファンの中には（筆者も含めて）このシリーズに物足りなさを感じる人がかなりいるだろう。一方、＜ピカレスクロマン＞のテーマにさほどこだわりのないらしい80年代以降必殺ファンになった人たちの中には、このシリーズを高く評価する人が少なからずいるみたいである。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年5月1日公開したものを転載）

必殺からくり人富嶽百景殺し旅

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷13

13作目・必殺からくり人富嶽百景殺し旅

－「新必殺からくり人」の焼き直し

○寸評

このシリーズは、出演者の一部をいれかえたのみで、設定もテーマもストーリーも「新必殺からくり人」と同様なスタイルで作られているので、特に言及することはない。

確立した基本フォーマットを踏襲して作品制作する場合も、そのシリーズ独自の要素を付け加えて独自性を保っていたかつての制作姿勢と比較すると、前作のスタイルを完全に踏襲した独創性の少ない作品となってしまった。殺し旅という設定は斬新だったが、2度同じ手法を使うと新鮮味は薄れてしまう。スタッフたちの創造力にもかげりがみえてきて、マンネリ化におちいらずにシリーズを継続させるのが限界に近付いたことを感じさせる作品だった。

(ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年5月1日公開したものを転載)

翔べ!!必殺うらごろし

◇テーマとストーリーからみた必殺シリーズの変遷14

14作目・翔べ!!必殺うらごろし

○シリーズの特徴

筆者は、このシリーズを全話はみていないので、正確で客観的な分析はできない（DVD-BOXの上巻分と最終回は観ている）。このシリーズの内容に関しては、『必殺！裏稼業の凄い奴ら』（フットワーク出版社、1994年刊行）第4章での「翔べ!!必殺うらごろし」言及箇所が参考になった。

このシリーズは、それまでの基本フォーマットを無視して（あるいは破壊して）作られたといったことが前述した著作も含め何人かのファンによって語られている。それまでの「頼み人から報酬を受け取って仕事を行う」という基本設定を無視して、主人公たちが報酬を受け取らずに殺しを行うという設定にしたのもその一環だろう。

これは、マンネリ化を打破して新鮮な作品を作るための苦肉の策でもあるし、また＜ピカレスクロマン＞のテーマを放棄し、＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマに基づいて番組作りを行った当然の帰結ともいえる。「頼み人の晴らせぬ恨みを晴らす」「許せぬ悪人たちを制裁する」というテーマに基づいて作品を制作するのであれば、頼み人から報酬を貰わなければならない必然性はない。むしろ報酬を受け取らない方がテーマが明確になる。（1981年頃発売された雑誌の中で、制作者の山内久司氏か櫻井洋三氏が「お金を貰わずに悪人を殺している時代劇の登場人物は、ただの殺人鬼だ」といった発言をしていた。だがこれは、主人公たちに形式的にお金を受け取らせていたことを正当化するための発言だろう。）

また、基本フォーマットの破壊の件に関しては、シリーズの根幹をなす設定を壊さなければマンネリ化を防げないということは、もはや必殺シリーズをマンネリ化させずに作り続けることが限界にきたことを示している。

○ストーリーの特徴

シリーズ序盤は、オカルト色をとり入れたこともありフィクション色のある作品も作られたが、全体的には「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」メインの作品作りとなっている。「恨みを晴らす」というテーマが強調されているので、ストーリーも悪役の描写・被害者の描写がメインとなっているといえる。

□最後に

「翔べ!!必殺うらごろし」で必殺の基礎・土台を一度解体し、次作の「必殺仕事人」でシリーズをあらたに生まれ変わらせたというのが、ファンの最大公約数的な見解なのかもしれない。

筆者自身の個人的見解を述べれば、この時点でスタッフたちは2つの選択肢を迫られたと考える。マンネリ化しない新鮮な作品を作りたいのであれば、必殺シリーズの継続にこだわらず、

新しい設定のあらたな作品を作り出す。必殺シリーズの継続にこだわり基本フォーマットを踏襲した作品作りを続けるのであれば、もはやマンネリ化におちいるのは避けられない。

あらたな設定の作品のアイデアも浮かばないし、冒険した「翔べ!!必殺うらごろし」は視聴率が低迷した。だから、いつマンネリ化におちいってもかまわないから、もう一度基本フォーマットを踏襲したオーソドックスな（ただし新しさはない）作品を作ろう、そうして出来たのが「必殺仕事人」であろう。「必殺仕事人」のストーリーは、序盤はフィクション色のつよい作品が何本も作られたが、途中から「カタルシスプロット（悪役の悪事、仕事の依頼の原因となる事件・出来事、頼み人・被害者の悲しみの姿を描いたプロット）」に基づいた「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」が大半を占めたように思える。（ただし、「必殺仕事人」に関しては全話観たわけではないので、正確なことはいえない。）

「必殺仕事人」以降の作品はリアルタイムで一通りみたが、大部分が「カタルシスプロット」に基づいた「カタルシスドラマ」「シリアスドラマ」であったはずである。

（ブログ「ミルクたっぷりの酒」に2010年5月1日公開したものを転載）

本稿は、必殺シリーズの特徴を2つのテーマ（＜ピカレスクロマン＞＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞）、3つのストーリー要素（「フィクション」「ハードボイルド」「シリアスな人間ドラマ」）から分析することを目的としてきた。

シリーズ15弾の「必殺仕事人」中盤以降は、設定や出演者の違いにかかわらず、どのシリーズも＜カタルシス（懲悪）ドラマ＞のテーマに基づいた「シリアスな人間ドラマ」重視のストーリー（ただしパターン化した単調な構成のものが多い）作りがなされていて、2つのテーマと3つのストーリー要素という点からは特に違いがみられないので、ここで執筆を終了とする。

最後に、ここで述べた筆者の必殺シリーズ感に影響を与えた文献をあげておく。（現在は入手困難と思われる。）

初期必殺シリーズが＜ピカレスクロマン＞というテーマに基づいて制作されているということは、雑誌『ALLAN(アラン)』第11号（1982年8月5日発行）に掲載された「必殺における悪の魅力」という記事からインスパイアされた。

また、「必殺仕掛人」の藤枝梅安がビジネスとして冷徹な殺しを遂行しているのに対して、「必殺仕置人」の登場人物が悪人に対して怒りの感情をむき出しにして仕置きを行っているという指摘は、1980年代前半に読んだ記憶がある。（多分、必殺シリーズ・ファンクラブ会長の山田誠二氏がサントラLPに書いた解説文だったような気がする。山田氏は、仕掛人のドライな殺しよりも仕置人の怒りの感情をむき出しにした仕置きのほうに魅力を感じていたらしいが、筆者は仕掛人や仕置屋、新仕置人のビジネスとしてのドライな殺しのほうに魅力を感じていて旧仕置人はそれほど好きな作品ではない。）